

セルビア中世美術における寄進者像

—ジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院ドラグティン王礼拝堂—

嶋田 紗千

はじめに

本稿の主題であるジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院（図1）は、中世時代の古都ラス（セルビア南部の現ノヴィ・パザル）のデジェヴァ渓谷とラシュカ川の上の見晴らしのよい高台に位置する中世セルビア王国初期の修道院である。聖堂には1170-71年に完成したという銘文が聖堂内のフレスコ画に残っていた¹。聖堂と修道院の寄進者は、ネマニチ朝の創始者ステファン・ネマニャ（在位：1171-96年）である。息子である初代戴冠王ステファン・ネマニチ王（在位：1196-1228年）が書いた父ネマニャの伝記「聖シメオン伝」によると、ネマニャは兄たちとの覇権争いで洞窟に幽閉され、その時に聖ゲオルグに助けをもらい、その感謝の証として彼に捧げる修道院を丘の上に建てることを約束したという伝説が残る²。しかし元々聖堂がなかったところに新たに聖堂を建立するには特別な理由を必要としたために、敢えて逸話を作り上げ、権力の象徴として高台に建立したのではないかとネシュコヴィチは指摘する³。

「ジュルジェヴィ・ストゥポヴィ」という名称は、「ストゥポヴィ（ストゥプの複数形）」は現在「柱」を意味するが、中世時代では「塔」を意味したため、「ゲオルグの塔（複数形）」という意味で、聖堂の正面に塔が二つあったことから、のちに命名された⁴。

敷地内には、ネマニャの曾孫にあたるドラグティン王（在位：1276-82年、スレム王：1284-1316年）によって建立された礼拝堂もある（図2）。死後、ドラグティン王はそこに埋葬された⁵。祖先が寄進した聖堂または修道院に増築する者は「第二の寄進者」と呼ばれ、長子の特権だったと考えられる⁶。同じような例としては叔父のラドスラヴ王（在位：1228-33年）もネマニャが寄進したストゥデニツァ修道院の主聖堂にナルテックス（通称、ラドスラヴ・ナルテックス）を、ドゥシャン皇帝（王位：1331-46年、帝位：1346-55年）も曾祖父ウロシュ一世王が建立したソポチャニ修道院の主聖堂に鐘楼を寄進している。

14世紀末にオスマン帝国によってセルビアが支配され、ジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院もその影響を受けた。17世紀末には、塙土戦争で修道院が大幅に壊され、その後、大火に見舞われた。1912年のノヴィ・パザル解放戦ではオスマン軍が留まったため、大砲が放たれ、そして第二次世界大戦では、ドイツ軍の燃料庫として使用された。悲劇的な状況を経験した修道院の改修工事が行われ始めたのは、第二次世界大戦以降のことである（図3）。しかし、継続的には行われず、本格的に実施されたのは、ユーゴスラヴィア紛争とコソヴォ紛争が落ち着いた21世紀に

入ってからである。修道院内の聖堂建築が補強され、コナック（宿坊）等が再建され、そしてやっと修道士が住めるようになった。

1920年にペトコヴィチは主聖堂のフレスコ画が剥落の危機に瀕していたため、セルビア王立アカデミーと協議し⁷、その結果フレスコ画の一部は失われることとなった⁸。残されたフレスコ画は1947年に聖堂の壁から慎重に取り外され、処置を施し、現在もベオグラード国立博物館に保管される⁹。フレスコ画はペンデンティブやナルテックスにわずかに残るものの、建立時の姿を想像することは困難な状況である。

一方、ドラグティン王礼拝堂は、規模は小さいものの、大部分のフレスコ画が残された。屋根が損傷しなかったことにより壁面も保護され、戦争による大きな損害もなく、現在に至る。ヴォールトには4つの「セルビア教会会議」という歴史的な場面、側壁には「アブラハムの饗宴」、「聖顔布」、諸聖人像、そして寄進者像とネマニチ朝の成員が描かれる。

ドラグティン王礼拝堂は、セルビアの歴史的場面と王朝の人々が強調された珍しい礼拝堂である。寄進者の構図の中でキリスト像が配される位置、「セルビア教会会議」と王朝の成員の表現、寄進者の模型、そして寄進者の権利と制作年について考察していきたい。

1. セルビアにおける献呈図の歴史について

中世セルビア王国のネマニチ朝が栄えたのは、ビザンティン帝国の末期である12世紀後半から14世紀後半までのわずか200年間である。しかし、この間バルカン半島北西部のばらばらであった小国を纏め上げ、同時にセルビア正教会を設立し、多くの聖堂や修道院を建立したことで、歴史に名を刻む王朝となった。そのため、セルビア人の基礎を築いたといっても過言ではない。そのような王朝の支配者たちの姿がどのように描かれてきたのか見ていきたい。支配者の姿はナオスの西側またはナルテックスに描かれた献呈図で確認することができる。献呈図とは、寄進者である王が聖堂の模型をもってキリストに捧げる図を指す。セルビアでは、寄進者が一人で描かれるだけでなく、祖先を伴って一つの構図として表されることが多い¹⁰。

ビザンティン世界の寄進像は、伝統的に奉納物を持たず、プロスキネシス（跪拝）の姿勢、またはキリストや聖人よりも小さく描いて敬虔さを表してきた¹¹。例えば8-9世紀のシナイ山の聖エカテリニ修道院の聖イレネと寄進者ニコラスのイコンではイコンの左端にプロスキネシスの姿勢で、極めて縮小化した寄進者像が表された。またイスタンブールのハギア・ソフィヤ大聖堂にある9世紀末-10世紀初頭のナルテックスのモザイク画「キリストに修道院を捧げるメトキティス」も同様の姿勢で表される。いずれも一人の寄進者がキリストまたは聖人の前で信仰深いキリスト教徒として細やかに表されてきた。しかし、12世紀以降、シチリアやイスタンブールでもキリストや聖人とほぼ同じ大きさで寄進者が立像で描かれるようになる。その理由についてシェフチェンコは皇帝の戴冠図や金印勅書との関係性を指摘する¹²。しかしながら、妻子と共に描かれることはあっても祖先を伴って描かれることはビザンティン世界でも稀である。しかしながら、セルビアで突然寄進者が祖先を伴って描かれるようになったわけではなく、段階を追って新しい図像が生み出されてきた。

ネマニチ朝の創始者ステファン・ネマニャは、前述した通り、兄弟との争いの結果、多くの領

地を取りまとめる大ジュパン（大族長）となり、多くの聖堂の復興と建立を行った。退位後は末息子修道士サヴァと共にセルビア正教会の布教に取り組み、アトス山にヒランダル修道院を寄進し、修道士シメオンとなる。そのため大スヒマ姿の修道士として描かれる。しかし、存命中に描かれた肖像画は現存していない。ネマニャは死後に列聖されて聖人となったため、後世には「理想化された修道士」として表された。13世紀初頭にストゥデニツァ修道院の聖母聖堂に寄進者像として描かれたが、1568年に加筆されたために構図のみ原型を留めていることが複数の研究者によって指摘される（図4）¹³。寄進者ネマニャは聖母に導かれながら、背もたれのある玉座に座るキリストに聖堂の模型を捧げる。この図像のオリジナルは、サンクトペテルブルク国立図書館に保存される四福音書写本291番（1067年）やアトス山のイヴィロン修道院図書館の写本5番（13世紀末）であることがジヴコヴィチによって確認された¹⁴。

ミレシュヴァ修道院の聖堂ナオス南東部のヴラディスラヴ王の献呈図（1223年頃）でもストゥデニツァと類似した寄進者像が確認される。しかし、少し離れたナオス北西部には祖先たちと兄弟が直立姿勢で並び、彼らは一様に手で祈りを表しており、あたかも献呈図の続きのような構成となっている。

その半世紀後に描かれたソポチャニ修道院のウロシュ一世王の献呈図（1270年頃）（図5）では、聖母と聖堂の模型を持つ寄進者ウロシュの間に修道士姿の祖父（ネマニャ）と父（初代戴冠王）、そして寄進者の後ろには彼の息子ドラグティン王子とミルティン王子が一列になってナオスの南壁から西壁に描かれる。献呈図に登場する人物は皆祈りの姿勢で、少し頭を下げた姿をしている。これまでと大きく異なる点は仲介者の役割が聖母だけでなく、祖先たちも担うようになったことである。

そして、その20年後に描かれたドラグティン王礼拝堂の献呈図（1282-83年）（図9）では更に発展する。この件に関しては後述する。

2. ドラグティン王礼拝堂の装飾プログラム（図6）

ドラグティン王礼拝堂の寄進者ステファン・ドラグティン王は、父ウロシュ一世王との関係の拗れによって父を退けて王位に就いたため、母イエレナ王妃と大主教ヨアニキエから即位を認められなかった。王は大主教を罷免し、母に領土の一部を分割して統治者（女王）とした。そして罪滅ぼしとして聖堂や修道院の建立および改修に努め¹⁵、その一環として曾祖父ネマニャの建立したジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院に礼拝堂を建立したと考えられる。

礼拝堂は修道院内の南西にあった入口門の鐘楼を改築したものである（図7）。建物はほぼ正方形の平面で、東側に半円形のアプシスがある至聖所（現在のものは1925年以降に設置）、北側に入口があり、四分割された交差ヴォールトの天井で覆われている。至聖所と入口にはアーチあり、南壁と西壁の上にそれぞれリユネットがある。南西角にはドラグティン王の石棺が位置し、墓所としてこの礼拝堂は造られた。

小さい礼拝堂の献呈図（図9）は、南壁西側にキリストが玉座に座り、その左（右手側）に寄進者の祖先の列（左から曾祖父、祖父、父、母）、キリストの右（左手側）の西壁には寄進者とその妻子、弟夫妻が並んで描かれる¹⁶。二列に別れてはいるが、寄進者をキリストへ導く役割

は、南壁に描かれた祖先の列が行うという画期的な構図となっている。これまで仲介者として描かれてきた聖母の姿はここにはなく、その代わりとして祖先たちが担っている。また、キリストは至聖所に一番近い位置ではなく、南壁西側に配されるため、祖先たちは至聖所を背にしている。北側に開かれた入口から見て、正面（南壁）にキリストと祖先たち、その右側（西壁）には南向きに礼拝堂の模型を持つドラグティン王、両手で祈りを示した息子ヴラディスラヴと妻カテリナが描かれる。キリスト像と壁面は異なるものの、ドラグティン王とその妻子はビザンティン美術の法則でキリストに祈りを捧げている。一方その隣に描かれた弟ミルティン王と妻¹⁷は共に正面の至聖所方向を向いている。スポティチは、ヤシュニヤの聖堂の至聖所についての論考の中で、ナオスに描かれた預言者イザヤの祈りの姿勢について至聖所の「犠牲の礼拝」に参列しているように調整されて描かれたことを指摘している¹⁸。祈りの姿勢は礼拝に参列していることを意味し、正面向きの姿はそこで時空という名の場面が変わることを示すという。つまり、ここでは祖先たちと寄進者親子は目の前に描かれたキリストの方を向く一方、正面向きのミルティン王夫妻は、至聖所と向き合っているため、これまでの一方向の献呈図とは、異なる構成といえる。ミルティン王の寄進者像または肖像画はその後にも伝統的な謙虚な祈りの姿勢で描かれることはなく、正面を向いた堂々とした王の姿で表され、14世紀に登場する王朝の家系図「ネマニヤの樹」を予見させる。それゆえ、14世紀以降の肖像画の2つの特徴である寄進者の願望と献呈図のリズムの消失がドラグティン王礼拝堂で見られることを「肖像画の萌芽」とラドイチチは記した¹⁹。

東壁アーチにケルビム、マンディリオン（聖顔布）、その左右に聖母の両親であるヨアヒムとアンナ、左右のピラストには柱頭聖人聖シメオンが描かれる。この修道院を創設したネマニヤ（のちの聖シメオン・ネマニヤ）を称えて、敢えて同じ名前の聖人の図像を二カ所に描いたと考えられる。

入口正面にあたる南壁上部リュネットには「アブラハムの饗宴」（図9-1）が表される。「アブラハムの饗宴」は「聖三位一体」を象徴している図像であるため、この聖堂が聖三位一体に捧げられた礼拝堂であることを暗に意味している²⁰。同時に三位一体に祝福された王朝であることを意図して描かれたとジュリチは指摘する²¹。

西壁上部リュネットには3つのメダイオンに聖人がそれぞれ描かれる（図9-2）。左から聖コスマス、聖パンテレイモン、聖ダミアノスである。コスマスとパンテレイモンは銘文が残っているが、ダミアノスには現在確認できない。しかし、コスマスとダミアノスは共同聖人であり、メダイオンの地色が共に褐色であるために銘文のない聖人は「聖ダミアノス」と推測することができる。

入口北アーチにはキリストと2人の聖人が描かれる。聖人たちは風化による剥落が激しく、姿も銘文も確認することができない。しかし、ジョルジェヴィチはキリストから祝福を受ける聖ペテロとパウロであると説明した²²。

その上の北壁にはキリストの顔が描かれた褐色のケラミオン（石板）、その左右に銘文が読み取れない半身像の聖人が2人描かれる。ジョルジェヴィチはこの2人の聖人を聖キリルと聖ヨハネであると断定した²³。その理由として、この礼拝堂が完成する前にドラグティン王が落馬して大けがを負い、その治癒を願って聖パンテレイモン、そして二組の共同聖人、聖コスマスと聖ダミアノス、聖キロルと聖ヨハネの5人の医師聖人を敢えて選んだと推定した²⁴。しかし、銘文が

後者の一組は残っていないために断定は控える。

ヴォールトには歴史的図像である「セルビア教会会議」の4場面「ステファン・ネマニチ王への譲位」(1196年頃)、「ウロシュ一世王の戴冠式」(1243年頃)、「ドラグティン王の戴冠式」(1276年頃)、「ミルティン王への譲位」(1282年頃)が描かれる²⁵。ソポチャニ修道院では「セルビア教会会議」は一場面しか描かれなかったが、ここでは交差ヴォールトの狭いセルに4場面が堂々と収められた(図8)。この件については後述する。

3. ドラグティン王礼拝堂の献呈図についての考察

(1) キリスト像が配される位置について

前述した通り、この礼拝堂ではキリスト像は南西の角に位置する。通常聖堂は東側に至聖所があるため、キリストを至聖所に近いところに配する。これまで見てきたストゥデニツァやソポチャニの献呈図でも必ずキリストは構図の東側(左側)に表されてきた。しかし、ここでは一番東側に表されるのは、ウロシュ一世王の妻で寄進者の母イェレナ女王であり、他の祖先の最後尾といえる立ち位置である。至聖所に背を向けることは基本的に装飾プログラムのルールに反するが、この礼拝堂の入口が北側にあるために、入った正面にキリストを配すように工夫されたとも考えられる。しかしながら、この礼拝堂の建物は元々鐘楼付きの門であり、修道院の入口として利用されていたことを知ると見え方は変わってこよう(図7)。13世紀末に鐘楼から礼拝堂へ造り替えた²⁶という説明はあっても、礼拝堂になってからも「至聖所がなかった」という説明はどこにも書かれていない。このフレスコ画が描かれた当時まだ入口、つまり「門」として使われていたとしたら、キリストが表された位置が南西角であることも理解できよう。南西角はこの鐘楼付きの門の建造物にとって入口(現・至聖所)と出口(現・出入口)から見て一番奥に当たる。この修道院は丘の上の狭い平地に位置しており、限られたスペースしかない。修道院の外壁の先は急な傾斜となっており、新しい建造物を建てることができなかったために修道院の入口門であり、鐘楼であった建造物を「礼拝堂らしきもの」へ改造したと考えられる。この礼拝堂が建立されたのはドラグティン王が30代(1280年代)の時で亡くなるまでに30年ほどある。それゆえ、フレスコ画が描かれた当時の状況は異なっていたことが想定される。

描かれた当時、至聖所が実際に造られていたかどうかは今となっては不確かである。しかし、20世紀の初頭の時点では、至聖所は存在せず、ネシュコヴィチが礼拝堂の建造物を通して修道院の敷地に入ったことを記しており²⁷、尚且つ1925年に建築家コスタ・ヨヴァノヴィチの提案で建築家ビニチュキがこの礼拝堂に新たに至聖所を建てたことが知られる²⁸。それゆえ、キリスト像が描かれた当時、入口門としての機能がまだ礼拝堂の建造物にはあった可能性があり、キリスト像が現在の至聖所側(東側)ではなく、西側に配されたと考えられる。

(2) 「セルビア教会会議」と王朝の成員の表現について

前述した通りヴォールト(図8)と南壁(図9-1)と西壁(図9-2)にはネマニチ朝の成員が描かれている。献呈図のネマニチ家の成員の図像は、ヴォールトの「セルビア教会会議」の4場面と連動している点について注目したい。

南壁に描かれているドラグティン王の曾祖父シメオン・ネマニャと祖父にあたる初代戴冠王（図9-1）は、東側のセルに「ステファン・ネマニチ王への譲位」（図10）、つまり父から息子へ支配権を渡す歴史的な場面に再び表されている。左側に修道服を着ているネマニャ、中央には玉座に座る初代戴冠王が確認できる。その右側の聖職者は顔の部分が剥落しているため確証できないが、戴冠王の弟の修道士サヴァ（のちの大主教）であった可能性が高い。戴冠式ではなく、譲位の場面が描かれた理由は、戴冠式が行われたのは歴史上1217年頃といわれ、ローマ教皇から戴冠されている。当時すでにネマニャは亡くなっており、戴冠式よりも譲位の方が適した場面であるとドラグティン王が判断したと推測できる。

南側のセルにはドラグティン王の父ウロシュー一世王が中央に描かれる。彼は兄から王位を引き継いでおり、ドラグティン王からすると直系には当たらない。そのため、ウロシュー一世王の左右には聖職者が配された「ウロシュー一世王の戴冠式」が表され、真下にはウロシュー一世王が描かれる（図9-1）。

西側のセルの「ドラグティン王の戴冠式」は礼拝堂の模型を持った寄進者ドラグティン王（図9-2）の真上に描かれ、その下には彼の石棺が位置する。ドラグティン王は謀反を起こし父王から王位を奪い取ったため、中央の玉座に一人で座り、左右に聖職者を配した「ドラグティン王の戴冠式」が描かれたと推測できる。

北側のセルにはビザンティン皇帝の服装をした人物が2人配され、その右側に聖職者の人物が描かれる。中央の人物はミルティン王と思われ、左の人物は王位を譲ったドラグティン王であることが分かる。それゆえ、ドラグティン王からミルティンへ王位が譲られた「ミルティン王への譲位」の場面であることが分かる。その左下（西壁）にはドラグティン王とミルティン王の姿が表される（図9-2）。

この四分分割した交差ヴォールトは下部の図像との対応に適しているといえる。それぞれの場面の近くに関連する人物が配され、上下が上手く結びつく構造となっている。ヴォールト東側のセルに王朝を記念する初の譲位の場面、南と西へ歴代の戴冠式の場面が続き、最後に新しい時代の譲位の場面が出入口である北側のセルには配される。同時に下部壁面では、歴代の王たちが並び、それに対応している。また南壁上部の三位一体を表した「アブラハムの饗宴」の図像が礼拝堂内の王朝の成員を祝福しており、永久に王朝が繁栄することを願って描かれたといえよう。主なネマニチ朝の成員を一堂に会することができ、そして王朝を祝福する図像を備えたこの装飾プログラムは、天上から祝福された家系図「ネマニャの樹」²⁹の兆しが伺えるといえる。

（3） 寄進者の模型について

セルビアの献呈図で欠かすことができないものといえる捧げ物の描写について考察したい。一般的に「寄進者の模型」といわれるが、献呈図で寄進者が手にもつ聖堂などの記念碑の描写のことを指す。研究者によってこの名称は異なり、例えばラドイチチは「記念碑の模型」³⁰、ヴェルマンズは「聖堂の模型」³¹、バビチは「寄進者が守護聖人に捧げる描かれた聖堂」³²、ヴォイヴォディチは「手の中の記念碑のイメージ」³³と称している。近年においては簡易的な表現として「寄進者の模型」が定着している。

縮小された聖堂などの模型をキリストへ捧げるという場面ではあるが、実際に模型を捧げるこ

とを意味しているのではなく、聖堂などの捧げものを小さく描いて図解された建築物の「イメージの本質」³⁴を定義したもので「奉納すること」を象徴している。

これはセルビアだけで描かれた図像ではなく、ビザンティン帝国やその周辺諸国、そして古代においても、フレスコ画やモザイク画、レリーフ、イコン、彩色挿絵、コインなど様々な媒体で表れる³⁵。古代ギリシアなどにおいては建造物の建築模型であるマケットを模して描写したといわれる³⁶。しかしセルビアにおいては献呈図が聖堂内のナオスの南西壁またはナルテックスという比較的出入口の近くに配されることが多いため、建造物が完成し、至聖所や円蓋のフレスコ画が描かれた最終段階で着手したと考えられ、建造物の外観を実際に見て描いたことがマリノヴィチの調査によって判明した³⁷。結果としてセルビアの寄進者の模型の図はかなり正確に描写されている。円蓋や窓の数や形状は現在の建物の様子と近似していることが多い。例えば、寄進者が聖堂の一部（礼拝堂やナルテックス、鐘楼のみ）を寄進した場合、その部分しか描かないこともリアルに表され、描写の信憑性の高さを示している。献呈図で描かれる建物は三面が分かるように描写されているほか、観る者が混乱しないように描く方向も考慮されている。例えば、ミレシュヴァでは、聖堂内の南壁に献呈図が配されているため、模型は北西方向から見た聖堂の様子を描写しており、西側の入口と北壁の外観、至聖所の半円形の形状を確認することができる。このような忠実な描写がセルビアでは散見できるが、ドラグティン王礼拝堂の模型においては些か異なる。

ドラグティン王が手に持つ礼拝堂の建物（図9-2）と現在の建物の写真（図2）を比較してみたい。まず描かれた建物の右側に大きな入口が開かれ、左側に至聖所らしき半円形の構造物が見られる。その間の壁には窓が2つ開かれ、その下には石積が確認できる。屋根は長方形の二枚の金属板で構成された切妻式で、至聖所から入口にかけて少し長く描写されている。現在の写真で分かる通り、入口は北側にあるため、東側の至聖所と入口が一直線上にはなく、建物自体も正方形に近い形状で、それに伴い三角形の4枚の金属板からなる方形屋根が用いられる。「イメージの本質」を表したものだ考えると、必ずしも忠実である必要はないが、先行例から推測すると奇異といえる。

その理由として考えられるのが、先述した鐘楼から礼拝堂への改造である。既存の建物の再利用であることは前述した通り周知の事実で、部分的な造り替えが行われたにちがいない。その場合、新築で作る建造物とは作業手順が異なり、礼拝堂の外観が完成する前にフレスコ画が制作され始めた可能性が高い。予定していた外観を描いたが、実際は計画通りにはいかなかった結果として現在の相違が見られると考えられる。

（4） 寄進者の権利と制作年について

ヴォールト北側セルの「ミルティン王への譲位」は、この礼拝堂がセルビア王国の王位を弟に譲り、北部のスレム王国をドラグティン王が支配することとなった後に描かれたものと推定され、この礼拝堂の制作年代は1282-83年とされた³⁸。この修道院の近くのデジェヴァの宮廷に隣接したところに当時聖堂があったとされ、そこで譲位が行われたといわれる。しかし、フレスコ画が制作されたのは、その会議の時期に依存すべきなのか考察していきたい。

ジョルジェヴィチによると、フレスコ画の描かれる順番は、顔料が垂れることを考慮して上か

ら下に行われることが語られ³⁹、そのため、ヴォールトの歴史的場面から、リュネットの旧約の物語や聖人像、聖母の両親の描写、そして最後に献呈図が描かれたと考えられる。もし、この順で行われたとすると、「ミルティン王への譲位」の場面は比較的早い段階で描かれたことになる。譲位は「支配者になる」だけではなく、あらゆる権利が引き継がれることを意味する。その一つの権利として「クティトルの権利」というものがある。

「Ктитор (クティトル)」は、ギリシア語の κτήτωρ (所有者) からきており、古典ギリシア語の動詞 κτᾶσθαι (獲得する、権力を握る) に由来する。つまり、中世セルビアでは、聖堂などの寄進者を「クティトル」と呼ぶが、ただの寄進者ではなく、統治者であり、なおかつ寄付した人物を指す。これは、セルビアに限ったことではなく、東方キリスト教やビザンティン帝国内でも使用された伝統で、教会機関に寄進すると所有権を有することとなっている。中世セルビア時代の寄進に関する法律は、ビザンティン帝国の法律に遵守し、発展したものといわれる。新しい聖堂などを建立する場合、寄進者と教会機関 (主に主教) の間で事前に同意書が交わされ、寄進物は基本的に寄進者の私有財産となる、利益がある場合はそれをもたらす権利があり、また維持費が必要な場合は支払う義務が生ずる⁴⁰。その他、修道院長選挙に投票する権利、墓所を設ける権利、葬式・追悼式を行う権利、肖像画を描く権利、典礼で座る場所が確保される権利が含まれる。これらの権利のうち、墓所と肖像画の権利により、聖堂内に献呈図とその下に墓所を設けることができ、墓所聖堂として永遠の眠りに就く場所を寄進者は獲得することができた。

この寄進行為のことを「Ктиторство (クティトルストヴォ)」と呼び、セルビア正教会を支えるシステムとなっていた。中世時代に最も多く寄進した支配者はミルティン王とされ、コソヴォ・メトヒヤ、北マケドニアなどに42件の聖堂や修道院の復興または建立を行った。そのほかネマニャとドゥシャン皇帝も多く寄進したクティトルといわれる。

セルビア正教会は、ネマニャとサヴァによる布教活動から始まり、教会組織を確立する上でビザンティン帝国の寄進文化を導入する必要性があった。布教活動は聖堂や修道院を建立するだけでなく、フレスコ画の制作費用、書物の寄付、彩色写本の制作援助、実質的な修道院の運営資金の提供などさまざまな支援を行った。寄進行為の記録は、寄進憲章や聖堂内に書かれた銘文や肖像画として残される。法の整備をおこなうことで、寄進行為を推進したと考えられる。

寄進者の権利と義務は、私有財産であるため、もちろん相続人へと引き継がれる。ドラグティン王は1276年にクーデターを起こしてウロシュー一世王を追放したことにより、それらの相続権が大主教からすぐには得られなかった⁴¹。そのため、大主教ヨアニキエを罷免し、新しい大主教を選定することとなった。しかし、すぐには決まらず、新しい大主教がイエヴスタティエとなるのは、ヨアニキエが亡くなったあとの1279年以降といわれる。

寄進者の権利には、祖先が寄進した聖堂や修道院に関する権利も含まれるため、この権利を取得しなければ、祖先の建立した聖堂や修道院を修復・増築することができなかった⁴²。このことを考慮すると、ドラグティン王が曾祖父の修道院に礼拝堂を建立 (改築) することができる期間は1280年から1283年ということになる。「ミルティン王への譲位」の場面が描かれている以上、権利を有し、この会議が行われた1282-83年以降にフレスコ画の制作が開始されたことは明らかである。ただし、フレスコ画が完成した年と設定することは難しいといえよう。

4. 結語にかえて

ドラグティン王礼拝堂は、鐘楼門を改築して建立された特殊な礼拝堂であるため、建築構造とフレスコ画の関係を考察するきっかけとなった。実際にどのタイミングで至聖所が造られたのか立証することはできなかったが、明らかに描かれ始めた時点で至聖所がなかったことが以下の点から指摘できる。(1) キリストが描かれた位置が構図において至聖所から遠い。(2) 祖先たちが至聖所に対して背を向けている。(3) 寄進者の模型と現在の建築の外観が異なる。

至聖所は聖堂建築で最も重要な場であるため、一つの構図においてキリストは最も近い位置に配され、また聖職者や信者は至聖所向きに描かれるべきである。そして模型が実際の外観と異なるために、描かれた当時建物の壁はあっても礼拝堂としての外観が完成していなかった可能性が高い。つまり、模型に描かれていても至聖所があったことの証明にはなりえない。それゆえ、至聖所部分が完成する前にそれ以外の部分のフレスコ画がすでに描かれたと考えられる。

また図像選択は寄進者ドラグティン王の私的願望を大いに反映していることが明らかとなった。聖堂や礼拝堂は特定の聖人や祝日に捧げられるのが通例である。たとえば、ソポチャニ修道院の礼拝堂は、聖ニコライ小礼拝堂、聖シメオン・ネマニャ小礼拝堂、聖ステファン小礼拝堂、聖ゲオルギオス小礼拝堂では、それぞれその聖人の図像や聖人伝の場面が描かれる。しかし、ドラグティン王礼拝堂は至聖所部分のフレスコ画が現存しないとはいえ、「献呈図」の面積が広く、頭上に「セルビア教会会議」が広がり、明らかに王朝の成員が多く表されている。そのため、王朝の繁栄を願って神に祝福してもらうことを目的としているといえる。それは父王を追放して王位についたドラグティン王の個人的な負い目によるところが大きく、また怪我の治癒を願うために医師聖人を多く配した点も個人の願望の強さを表している。それゆえ、「ドラグティン王礼拝堂」と呼ばれ、王個人の願いがフレスコ画に表現されている。

そして、ネマニチ朝における支配者の肖像画の発展は法で守られた寄進行為の上に成り立っていることが明らかとなった。ビザンティン帝国で制定された法との違いは、今回は調査できなかったが、セルビア独自の法として改定され、施行しやすいように調整されたと考えられる。さもなければ祖先や子孫、配偶者を寄進者と一緒に描くことは許されず、セルビア独自の図像は発展しなかったに違いない。

セルビア中世美術において、バラエティーに富んだ人物像がなぜ描かれたのかという疑問は、まだ解決できていない。しかし、ネマニチ朝における献呈図、寄進者とその成員の図像の発展は、キリスト教の枠組みを超えた外的な要因によってさまざまに交錯し合っている。

本調査は、保存修復プロジェクトの一環として2ヶ月間筆者が修道院に滞在することで行うことができた。1970年代以来、保存修復作業ができなかったドラグティン王礼拝堂のフレスコ画を洗浄し、塩分除去し、壁を補強し、漆喰を補充し、最低限の着彩を行うことで、フレスコ画は描かれた状態に蘇ることができた。今後数十年より良い状態で維持できることであろう。この場をお借りして、住友財団と在大阪セルビア共和国名誉総領事館（大日本除虫菊株式会社内）のご支援に感謝したい。

註

- 1 Нешковић, Ј., Ђурђеви Ступови у Расу, *Рашка баштина* 1, 1975, 156; Нешковић, Ј., *Ђурђеви Ступови у Старом Расу*, Краљево, 1984, 12; Чанак–Медић, М., Бошковић, Ђ., *Архитектура Немањиног доба I. Цркве у Топлици и долини Ибра и Мораве*, Београд, 1986, 55–56; Николић, Р., Како је могао да гласи натпис у лунети главног портала са Ђурђевих Ступова из 1171. године, *Гласник ДКС* 15, 1991, 58–61.
- 2 シメオンとは、ネマニヤの修道士名で、死後聖人となり、聖シメオン・ネマニヤと呼ばれる。ステファン Првовенчани, *Сабрани списи “Живот светог Симеона”*, Београд, 1988, 67–68.
- 3 Нешковић, *Ђурђеви Ступови у Старом Расу*, 1984, 12–14.
- 4 命名については、以下参照。Милановић, В., *Програм зидног сликарства у припрамама српских цркава у XIII веку*. докторска дисертација, Београд, 2018, 107–8.
- 5 Нешковић, *Ђурђеви Ступови у Старом Расу*, 1984, 15; Гилфердинг, А., *Путовање по Херцеговини, Босни и Старој Србији*, Сарајево, 1972, 130–131.
- 6 Огуњевић, Т., *Благо Србије : културно-историјска баштина*, Београд, 2012, 92–97.
- 7 Петковић, В., Р., Народни музеј у 1920. год., *Годишњак СКА* 29, 1921, 29–34.
- 8 Петковић, В., Р., Извештај о стању и раду Народног музеја у 1921. год., *Годишњак СКА* 30, 1922, 251.
- 9 Дамјановић, В., Р., Конзерваторски радови на Ступовима у Расу, *Музеји* 1, 1948, 106–108; Мандић, С., Фреске скинуте са зидова неких порушених цркава, *Саопштења* 1, 1956, 169.
- 10 Радојчић, С., *Портрети српских владара у средњем веку*, Скопље, 1934 (=Београд, 1997).
- 11 Patterson–Ševčenko, N., The Representation of Donors and Holy Figures on four Byzantine Icons, *Δελτίον της Χριστιανικής Αρχαιολογικής Εταιρείας* 17, 1993–1994, 160.
- 12 Patterson–Ševčenko, The Representation of Donors, 1993–1994, 160–162.
- 13 Тодић, Б., Киторска композиција у наосу Богородичине цркве у Студеници, *Саопштења* 29, Београд, 1997, 35–45; Војводић, Д., Студенички гроб светог Симеона Српског: прилози о грађи и запажања о живопису, *Стефан Немања–преподобни Симеон Мироточиви. Зборник радова II*, Београд; Беране, 2016, 587–600.
- 14 Живковић, М., П., *Најстарије зидно сликарство Богородичине цркве у Студеници и његова обнова у XVI веку*, докторска дисертација, Београд, 2019, 497–498.
- 15 Тодић, Б., Сопоћани и Градац: узајамност фунерарних програма две цркве, *Зограф* 31, 2006–2007, 59–61.
- 16 Ђорђевић, И., Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, *Студије српске средњовековне уметности*, 2008, 264–270.
- 17 ミルティン王は4度結婚したため、当時の妻が誰であったのか不明。1人目イエレナ、2人目イェリサヴェタ、3人目アナ、4人目シモニダ。ギリフェルジングやラドイチチ、ジュリチはイエレナであったことを提唱しているが、ボシコヴィチはドゥブロヴニツクの商人の記録からハンガリーかフランスの王の娘、コンスタンティノープルの皇帝の娘であったことを紹介した。近年トディチによってイェリサヴェタかアナではないかと指摘される。Радојчић, *Портрети српских владара*, 1997, 27; Ђурић, В., *Српска уметности у средњем веку I*, Београд, 1997, 204; Ђорђевић, Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, 2008, 266; Чанак–Медић, М., Тодић, Б., *Стари Рас са Сопоћанима*, Нови Сад, 2013, 74.
- 18 Суботић, Г., Сузуки, М., *Манастир Светог Јована*, Београд, 2020, 79–81.
- 19 Радојчић, *Портрети српских владара*, 1997, 28.

- 20 Ђорђевић, Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, 2008, 269.
- 21 Ђурић, *Српска уметности у средњем веку* I, 1997, 204.
- 22 Ђорђевић, Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, 2008, 266.
- 23 Ђорђевић, Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, 2008, 266.
- 24 Ђурић, *Српска уметности у средњем веку* I, 1997, 204; Ђорђевић, Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, 2008, 267.
- 25 Ђурић, В., Историјске композиције у српском сликарству средњег века и њихове књижевне паралеле, *ЗРВИ* 10, Београд 1967, 131–137.
- 26 Ђурић, *Српска уметности у средњем веку* I, 1997, 204.
- 27 Нешковић, *Ђурђеви Ступови у Старом Расу*, 1984, 21.
- 28 Нешковић, *Ђурђеви Ступови у Старом Расу*, 1984, 22.
- 29 Petković, V., R., „Loza Nemanjića“ u starom živopisu srpskom, *Narodna starina* 5, 1923, 97–100; Радојчић, *Портрети српских владар*, 1997, 38–44, 48–50, 57–59; Đurić, V., J., Loza Nemanjića u starom srpskom slikarstvu, *Зборник радова, I Кон грес Савеза Друштвава историчара уметности СФРЈ*, Охрид 1976, 53–55; Ђурчић, S., The Original Baptismal Font of Gračanica and Its Iconographic Setting, *Зборник НМ* 9–10, 1979, 313–320; Ђурић, В., J., Лоза српских владара у Студеници, *Зборник у част Војислава Ђурића*, Београд, 1992, 67–79; Војводић, Д., Портрети владара, црквених достојанственика и племића у наосу и припрати, *Зидно сликарство манастира Дечана. Грађа и студије*, Београд, 1995, 294–297; Марјановић–Душанић, С., *Владарска идеологија Немањића*, Београд, 1997, 111–117, 152–173.
- 30 Радојчић, *Портрети српских владара*, 1997, 74.
- 31 Velmans, T., Les fresques d'Ivanovo et la peinture byzantine à la fin du Moyen Âge, *Journal des Savants* 1, 1965, 381.
- 32 Бабић, Г., *Краљева црква у Студеници*, Београд, 1987, 27.
- 33 Војводић, Д., Два прилога проучавању цркве Св. Ахилија у Ариљу, *Саопштења* 34, 2002, 93.
- 34 Стојаковић, А., *Архитектонски простор у сликарству средњовековне Србије*, Нови Сад, 1970, 34; Lipsmeyer, E., The Donor and his Church Model in Medieval Art, from Early Christian Times to the Late Romanesque Period, (PhD Thesis, Rutgers University, 1981), 121.
- 35 Patterson–Ševčenko, The Representation of Donors, 1993–94, 157.
- 36 Маринковић, Ч., Ктиторски модел–Слика макете или цркве, *Зборник радова Филозофског факултета* 36, 2006, 125.
- 37 Marinković, Č., Founder's model–Representation of a maquette the church, *ЗРВИ* 44, 2007, 151.
- 38 Ђурић, Историјске композиције у српском сликарству, 1967, 131–137.
- 39 Ђорђевић, Капела краља Драгутина у Ђурђевим ступовима, 2008, 265.
- 40 Троицки, С., Ктиторско право у Византији и немањићкој Србији, *Глас СКА* 167, 1935, 86; Шуица, М., Ктитор in: *Лексикон српског средњег века*, Ђирковић, С., Михаљчић, Р., ed., Београд, 1999, 336–339; Kazhdan, A., Ktetor in: *The Oxford Dictionary of Byzantium*, Alexander P. Kazhdan, ed., vol. II, New York and Oxford, 1991, 1160.
- 41 Тодић, Б., Сопоћани и Градац, 2006–2007, 61.
- 42 Марковић, В., Ктитори, њихове дужности и права, *Прилози за језик, књижевност, историју и фолклор* 5, 1925, 100–124.



図1 ジュルジェヴィ・ストウポヴィ修道院外観
(2020年撮影)



図2 ジュルジェヴィ・ストウポヴィ修道院
ドラグティン王礼拝堂外観 (2021年撮影)

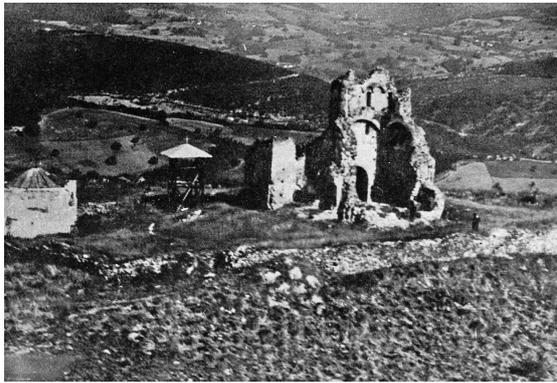


図3 ジュルジェヴィ・ストウポヴィ修道院外観
(第一次世界大戦後撮影)



図4 ストゥデニツァ修道院聖母聖堂の献呈図
(1568年加筆)

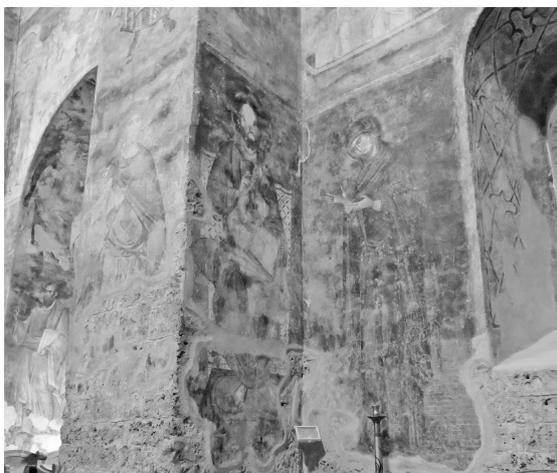
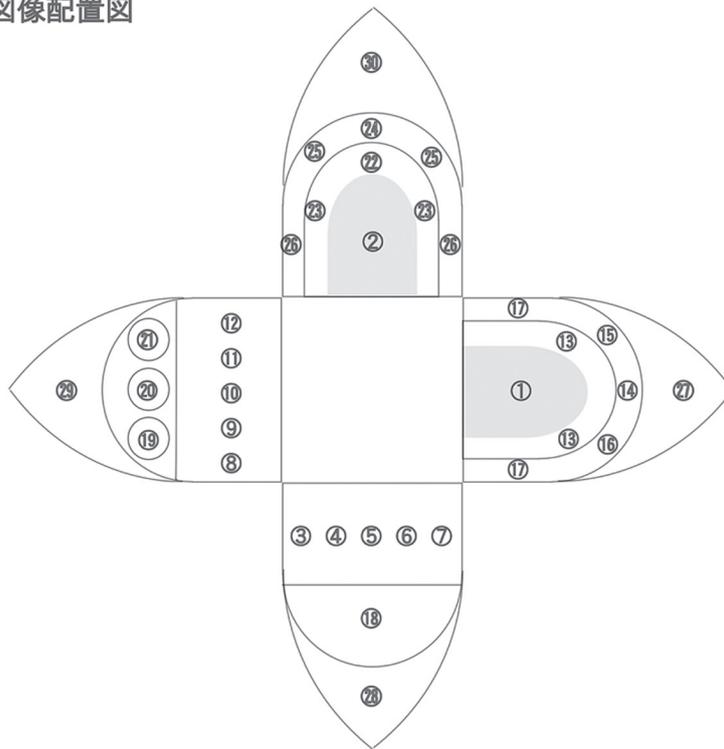


図5-1 ソポチャニ修道院主聖堂の献呈図
(1270年頃) ナオス南壁



図5-2 ソポチャニ修道院主聖堂の献呈図
(1270年頃) ナオス南壁と西壁

ジュルジェヴィ・ストウポヴィ修道院
ドラグティン王礼拝堂
図像配置図



- ① 至聖所
- ② 北側入口
- ③ キリスト
- ④ シメオン・ネマニャ
- ⑤ 初代戴冠王ステファン
- ⑥ ウロシュー世王
- ⑦ イエレナ女王
- ⑧ ドラグティン王
- ⑨ ヴラディスラヴ王子
- ⑩ カテリナ王妃
- ⑪ ミルティン王
- ⑫ ミルティン王の妻
- ⑬ ケルビム
- ⑭ マンディリオン
- ⑮ ヨアヒム
- ⑯ アンナ
- ⑰ 柱頭聖人シメオン
- ⑱ アムラハムの饗宴
- ⑲ 聖コスマス
- ⑳ 聖パンテレイモン
- ㉑ 聖ダミアノス
- ㉒ キリスト
- ㉓ 聖使徒
- ㉔ ケラミオン
- ㉕ 医師聖人
- ㉖ 柱頭聖人
- ㉗ ステファン・ネマニチ王への譲位
- ㉘ ウロシュー世王の戴冠式
- ㉙ ドラグティン王の戴冠式
- ㉚ ミルティン王への譲位

図6 ドラグティン王礼拝堂図像配置図

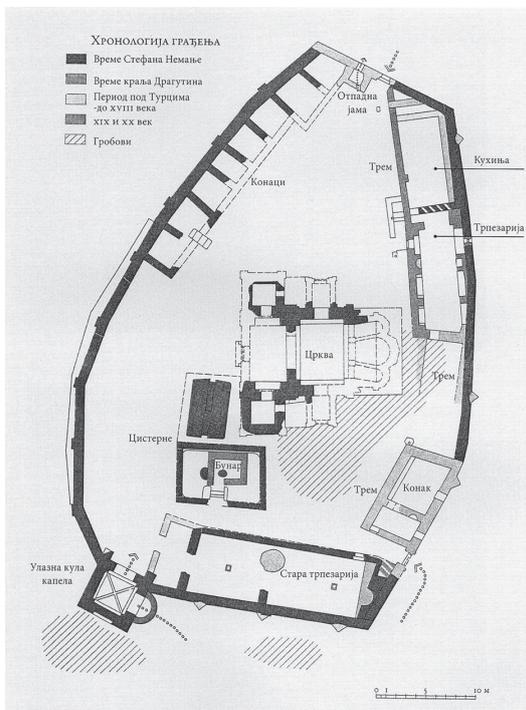


図7 ジュルジェヴィ・ストウポヴィ修道院平面図

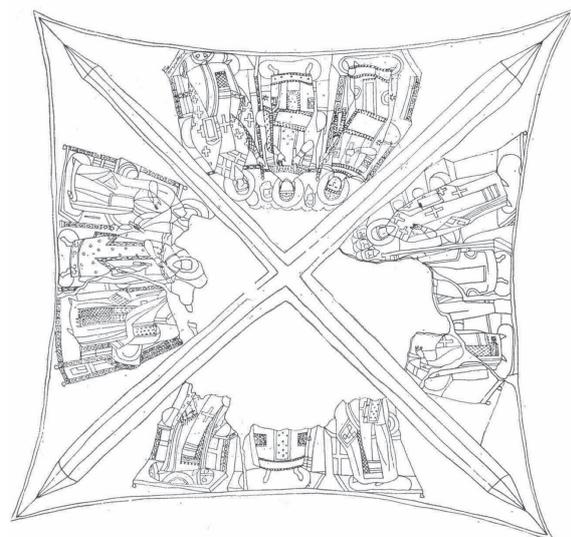


図8 ドラグティン王礼拝堂ヴォールト描き起こし図

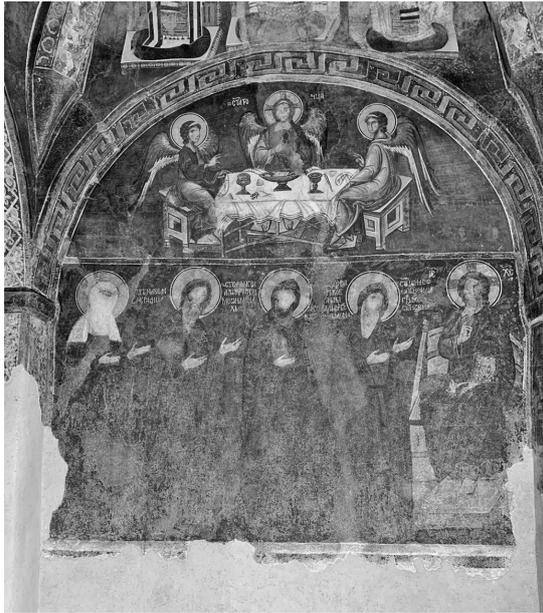


図9-1 ドラグティン王礼拝堂の献呈図（1282-83年頃）南壁

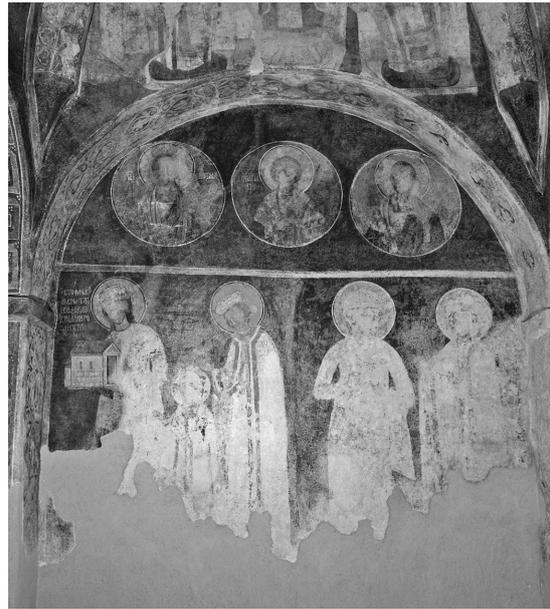


図9-2 ドラグティン王礼拝堂の献呈図（1282-83年頃）西壁



図10 ステファ・ネマニチ王への譲位（1282-83年頃）同礼拝堂ヴォールト東側



図11 ミルティン王への譲位（1282-83年頃）同礼拝堂ヴォールト北側

【図版出典】

図1：Slobodan Palma Botoski 氏撮影

図3、図7、図8：Нешковић, Ј., *Ђурђеви Ступови у Старом Расу*, Краљево, 1984.

その他については筆者撮影または作成